
こわれちゃえばいいんだ。

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こわれちゃえばいいんだ。

【Nコード】

N1161P

【作者名】

ひろ

【あらすじ】

世界が壊れるまであと
一週間 生き残れる人物はたったの一人
さあ コロシアエ
愛する者でさえ コロスノダ
そうじゃなきゃ あなたはシヌノダカラ

例えば君の妹が自分をコロソウと考えていたのなら
あなたはどうしますか？

もしもの願いはきみがしぬこと（前書き）

この話は、是非フィクションでいて欲しい。

でも、ノンフィクションになるかもしれない。

そんな物語です。

グロイ表現もあります。

心してかかって下さい。

もしもの願いはきみがしぬこと

第一物語「もしもの願いはきみがしぬこと」

世界が腐り始めたのは、ほんの何年か前の話で。別に何千年も前からだったわけじゃない。だって十七歳である俺が覚えている程の、何年か前の話なんだから。テレビで放送してたのだってちゃんと覚えてる。その時隣にいた女の名前は何だったかな。そっちのことは覚えてないや。まあ、いつか。

話がずれた、世界が腐り始めた話だっけ？ 簡単なことだよ。この地球が一週間後壊れるって話さ。原因は何だったか忘れたけれど、そんなの人間が勝手に二酸化炭素だの、人工物だの、地球を壊すようなことをしたからだろ。そんなの誰だって気付いても可笑しくない。でも、そんなのはどうだって良かった。大事なのはその後の話だ。それを聞いた瞬間、誰だって絶望した。それこそ、楽に死んだ方がいいと考えるくらいにね。でも、その後に言われた言葉が世界を腐らせたんだよ。俺はそう思う。

ここに一つ、地球から脱出出来る宇宙船が一つだけある。これは素人でも簡単に動かせる、いわば旅行用のものだ。開発中で、現在使えるものはこれしかない。もし、これを手に入れたければ……

世界に散った五つの鍵を、探し出せ

世界へ放送されたこの映像は絶望から希望へと導くものへと変わった。だがしかし、絶望はまたやってきた。五つの鍵を見つけるためには世界を回るのが必須の条件である。そのためには金が必要だ。

人間誰だって一番可愛いのは自分だ。俺だってそう。だから、昔隣にいた女が一体誰だったか、名前は何だったか、顔はどんなやつでどんな性格だったのかなんて覚えていない。大事なのはそいつがお金をどれだけ持っていて、どれだけ間拔けで、どれだけ俺に尽く

してくれるのかだ。

俺は略奪者だ。それこそ、俺は自分が生き残るためなら人殺しだって出来る。この映像が流れてから、警察はまともに動かない。政府は何もしない。一週間という期日はあまりに短い。地球が壊れるまでの時間を自分のために使いたいと考えるのは警察だろうと、政府の人間だろうと同じだ。それこそ、俺たち略奪者のように。

世界が変わったのは地球が壊れるから？ いや、違う。この、今、狂っている世界こそ、本来の姿だ。何千年も昔は、生きるために、自分の権力のために人殺しだって戦争だって起こしたのだから。現在も同じ。生きるためにどうやって相手を騙し、どうやって金を手に入れ、どうやって鍵の情報を手に入れるのか……

俺にとってはほんのゲームにすぎないけどね。

*

「おい、カイル。何ぼーつとしてんだよ」

「わりいわりい」

カイルと呼ばれた青年は自分と呼んだ人物の方へと顔を向け、愛想笑いをする。暗い物置らしきこの空間にはカイルとカイルを呼んだ青年、ピオラしかない。二人はダンボール箱のようなものに腰掛け、このほこりまみれの倉庫の中にひっそりと過ごしていた。電気は無い。薄暗い光は、この倉庫から出るための唯一の手段である扉から差し込むわずかな光と、この倉庫に置かれていた蝋燭が灯す小さな光だけだ。

ピオラはカイルの表情が読めたわけでは無いだろうが、声の調子から、この相棒は機嫌が良いと悟る。

「何だ。今日は随分と機嫌が良さそうだな」

ため息混じりに言うピオラに、カイルはにつこりと笑う。微かな灯火に映るカイルの顔は、かなり不気味であったが、それさえも慣れた空間であるのか、ピオラは驚きもせず、むしろ嬉しそうに口元に笑みを浮かべる。

被っていた黒い帽子をピオラに投げつけ、そこから現れた明るいオレンジ色の髪をぐしゃぐしゃとかく。受け取った黒い帽子を手でもて遊び、はは、と笑うピオラ。

「そら、機嫌はいいわな。強盗成功。十人もやって来たもんな」

けらけら笑うピオラに相変わらず不気味な笑顔を浮かべるカイル。その顔には赤い血がべつとりと着いている。それがカイルの血では無いことに、ピオラはもちろん気付いていた。それだけ相棒を信用し、そして恐ろしいと、思っているのだから。

ピオラの言葉に頷き、カイルは床に落ちている戦利品の中から骨付き肉を取りだし、かみ砕く。それこそ、百獣の王の様に。ピオラもその中から酒を取り出し、飲む、飲む、飲む。

「強盗成功はそりゃあ嬉しいさ。それに、今日はニイに会えるからな」

「ああ、エルニイな」

無邪気な子どものように言うカイルに、ピオラは笑いながら納得するように言葉を返した。だが、暗い中での表情は、言葉のみのキヤッチとなる。ピオラの表情は暗く、落ち込んだものであるものに、カイルは気付かない。いや、もしかしたら気付いていたのかもしれない。ただ、何も言わなかっただけで。

「楽しみだよ。だって、俺の“恋人”だからさ」

二人はいわばチンピラである。強盗、窃盗、殺人……生きるためなら何でもするような奴らだ。カイルとピオラは子どものころからの付き合いで、いわば幼なじみというべき存在である。途中学校は別々になったりもするが、また再会したりと、随分縁が深い仲であ

る。

この二人がチンピラへと成り果てたのはそれこそこの世界の変化からと言っても良かったが、カイルは少し違うと言わざるを得ない。子どもの頃から手癖が悪かったのか、万引きを多々起こし、喧嘩も派手にしていた。女遊びも好きで、付き合っただけで、付き合っただけで捨て……そんな生活を続けていた。だが、それでもカイルは満たされなかった。もっと刺激が欲しい。もっと、もっとと、求めた。その時にニュースは放送された。

どのチャンネルに回してもそのニュースしかやっていない。「世界は一週間後、壊れる」という馬鹿げたニュースだ。だが、カイルにはそれだけで十分だった。

一週間という期間はあまりにも短い。周りの大人達は、自分を守るのに精一杯。子どもはどんどん捨てられていった。そんな奴らを集め、ギャング団を作った。大人達を思い知らせる。自分を第一に優先しろ。もし、このギャング団に入りたければ“両親をコロシテコイ”。

瞬く間にこのギャング団は大きくなっていく。このニュースはそれほどに絶大な力だった。もし、一週間しかないなら、構わない。自分を捨てた親なんて“シンデシマエバインダ”。そんな考えの子どもはたくさんいたからだ。

カイルはニュースが放送された次の日の早朝、すでに真っ赤に染まっていた。

そのうちの一人であるエルニイは二歳年下の少女で可愛らしいというのが第一印象の大人しい少女だ。捨てられていた少女は、ギャング団の噂を聞き、この中に入った。カイルに「両親は川に捨ててきました」と、綺麗な笑みを浮かべて。カイルは楽しかった。自分の言葉で“たくさんの人物の運命が断ち切られている”というこの状況が。

そして、エルニイは速攻で告白してきた。もちろんカイルはすぐに了解した。こんなのただの遊びなのだから。

笑って無邪気に言った相棒に、ピオラは大きなため息を吐き、良かったな、と返しておく。そして、ピオラは知っていた。カイルの異常までに執着した非日常がどれだけ危険で、どれだけ人の運命を狂わせるかを。だが、ピオラは何も言えなかった。それこそ彼も非日常が好きで、一週間という期限付きの非日常は、とてもおいしいものだったからだ。そして、今日は一週間という期限が迫る三日前の早朝だった。

飲み干してしまった瓶を投げ捨て、立ち上がる。向かうはカイルの恋人、エルニイと非日常欲しさに両親の運命を断ち切らせた子ども達の元。カイルは笑う。無邪気に。ピオラも笑う。後悔に。

*

今日は三回目の集会の日だ。普段は自由に窃盗、強盗などをやらかしている彼らが集まる日。それはこの世界が崩壊する三日前というのも理由のうちだが、今日はもう一つの理由があった。カイルとピオラしか知らない、サブプレゼンテーション。

広い工場跡で行われる集会はざっと三百人ほど集まっているように見受けられる。上の柵から見下ろすように立っているカイルはその集まりように笑みを浮かべた。ピオラはただ、離れた場所でカイルを見守り、この人数の多さに、今日も後悔の念を抱く。

無邪気な笑顔を浮かべ、カイルは乗り出すように柵に捕まった後、“恋人”の名前を呼ぶ。呼ばれたエルニイは上擦った声で返事をした後、近くの階段から駆け上がり、カイルの横へと立つ。呼ばれた子ども達は、見せつけか何かをするのか、はたまた惚気話でもするのかと、苦笑を浮かべながら“リーダー”を見つめている。

「久しぶり。ニイ」

「お久しぶりです。カイル」

笑顔で挨拶するカイルに紅潮した顔を隠すように俯き、エルニイは返す。耳まで真つ赤のエルニイの様子にカイルは笑いながら、エルニイから視線を外し、たくさん子ども達を見つめる。いつもならエルニイを抱きしめたり、キスをしたり、実に“恋人らしいふり”をするのだが、今日はそのような前触れもなく、子ども達に話しかける。

「なあ、みんな。今日は話を聞いて欲しい。大事な話だ」

そのような唐突な“リーダー”の言葉に辺りはざわめき始める。だが、そんなざわめきでさえ、まるで効果音のように受け入れ、カイルは話し始める。エルニイはいつもと違うカイルに俯いていた顔を上げ、その横顔を見つめた。ピオラはそんなエルニイの姿を見つめていた。

「約束つてのは守る必要がある。そう思うだろ？」

唐突だった。あまりの唐突さに、辺りの効果音が消し去られてしまっただけに。そんな子ども達に、カイルは笑う。

「さて、その約束が破られていたとしたら、みんなはどうする？」

誰も何も言わなかった。ただ、カイルの言葉に耳を傾けるのみだ。「俺はやっぱり許せないなー殺してもいいよね？」

につこりと笑う姿は無邪気で。

「じゃあ、エルニイ。君に頼もうかな」

「え……？」

いきなり振られたエルニイ。そのことに驚いたわけではない。カイルは一度も、そう一度も、エルニイと呼んだことが無かったのだ。だが、彼は今、ニイと愛称では無く、確かにエルニイと呼んだのだ。とまどい、立ちつくしてしまったエルニイにまた、につこりと笑みを浮かべ、今度はエルニイを見つめて呟いた。声は小さいが、倉庫の中は不気味にカイルの声を全体へと響き渡らせた。

「だから、約束を破ったお馬鹿さんを、殺して欲しいんだ」

今度はわかりやすく、ゆっくり、丁寧に。そんな言葉が似合うしやべり方でエルニイに話しかける。エルニイは固まる。身体が動かない。そう、それこそ催眠術にかかってしまったかのような、そのような錯覚。

「もしもね、もしも俺の願いが叶うなら。その願いはきみがしぬこと」

そんなカイルの声は不気味に、だが平坦に倉庫に響いた。エルニイは身体を震わせ、真っ青にした顔を横に振り、やっと動き始めた身体を後ろへ、後ろへと、カイルから逃げるように動かす。カイルは何も言わない。追いかけることもしない。ただ、エルニイを見つめて笑っていた。

子ども達はこのやりとりを理解していない。彼女が何の約束を破ったのかが分からないからだ。

「ああ、そう言えばみんなにエルニイが破った約束の内容、教えてなかったね」

びくりと、身体を震わせたエルニイに今度は全く何もない、無表情の顔で、語りかける。

「きみは両親をコロシテナイ」

「……！」

「きみは両親に盗んだ物を全て渡してたね」

「そ、それ、は」

「これは約束を破ったってことだろ？」

「あ、あ、あ……あ、あああああ……！」

「じゃあさー俺の言うこと聞けよ、助けてやる」

そう言ってまた微笑んだカイルに、エルニイは助けを求める様に、ただ、うなずき、ただ、すがりついた。

しね

だが、カイルから呟かれた二言は、エルニイを絶望へと追いやる。いつの間にか手に握られた拳銃をエルニイに撃ち込み、あの世へと追いやった。その顔には笑みが浮かべられ、そして顔には血がはね、彼女は血溜まりへと堕ちていった。

二度と戻ることの出来ない、奈落の血溜まりへと、堕ちていったのだ。

絶命したエルニイだが、カイルは撃つことを止めない。カイルほどの腕なら、一発で死んでいるはずで、それに気付いているはずだが、彼は撃つことを止めない。

ばんばんばんばん！

鳴り響く音は途中でとぎれる。彼は球が切れるまで、彼女の身体に撃ち続けた。そして、笑い続けた。

「あははははははははははははははは……！ ああ、楽しい。うん。

やっぱり俺は、血が好きだ」

笑う笑う、無邪気に笑う。見るも無惨になった“恋人”を見つめ、彼は笑い続けた。

子ども達に視線を向け、何かいたずらを思いついた子どものように、笑い扉へと指を指す。その先は外だ。腐った世界だ。

「君たちに命令だ。こいつの両親をコロシテコイ。それこそ、無惨なやり方で」

彼は狂っている。だが、子ども達も狂っていた。先ほどまで仲間だった彼女を忘れ、ただリーダーの言葉を聞き、この扉から走って外へと出る。全員が消えてしまえば、残ったのは死体と、カイルと、ピオラ。ピオラは静かに立ちつくす。相変わらずの興奮状態のカイルに近づけば、自分が殺されることを、ピオラは知っていたからだ。だが、死体を近くに置いておけばそのうち彼は食べてしまうのではないか、人間では無くなってしまうのではないかと、ピオラはいつも恐れていた。

「大丈夫だよ。今日は随分と落ち着いてるからさ」

ピオラの心情をまるで読んだかのようにカイルは笑いかける。血まみれのカイルに眉を顰め、肩をすくめる。死体となった“友人の恋人”に目を向け、カイルに聞く。

「いつ気付いたんだ？」

「え？　さいしょっから」

無邪気という友人にはもう、すでに恐ろしさしか感じない。だが、この青年が元々狂っていたとはいえ、彼が人殺しをするまでには行かなかったはずだった。一週間という制約は、彼をここまで変えた。それこそ人ではなくなってしまったかと錯覚するほどに。

*

世界が壊れた理由なんて俺にはどうだっていいんだ。でも、でもさ。人は自由に生きるためには何だって出来ると思うんだ。俺がその一例だね。それに、この世界は腐っているから、俺が腐ろうとも世界は何とも思わないさ。君もそう思うだろう？

俺は自分が狂っているなんて思っちゃいない。だって、殺さなきゃ殺される。それは事実だし。両親に捨てられて憎しみが湧いたのは事実だし。それがちよつと度が過ぎているだけ。

喜びつてのは人それぞれ違うけど、それが欲しいと思う欲は誰だって同じだろ？　俺はただそれが変わっているだけ。

世界は壊れた。

後の三日間を彼がどのように過ごしたかは、彼と、その友人にしか分からない。

第一物語「もしもの願いはきみがしぬこと」 完

もしもの願いはきみがしぬこと（後書き）

この小説はほかの掲示板にて連載していた物を転載したものです。

わたしとあなたとすべてとさよなら

第二物語「わたしとあなたとすべてとさよなら」

世界が壊れたと、私のマスターは言っていた。あざけ笑うかのようにつたマスター。私はその瞳を初めて“恐ろしい”と感じた。マスターはどこかの会社の社長でお金がたくさんあって、そしてたくさん別荘があつて、たくさん車がある。私にはそのたくさん持っている意味、そして理由、価値、すべてを理解することは難しいが、それを見た人物は羨ましそうにしていたのを覚えている。

世界が壊れたのなら、この全てに意味は無いのではないか、私はそう考えていたけれど、マスターの生活に変わりはない。普段と変わらず、いつも通りに過ごしている。あまりにも普通すぎて、マスターが言っていた“世界が壊れた”という話が嘘みたいだ。でも、これが事実だと、私は理解をしていた。

私はアンドロイドだ。

プログラムされた物ならなんでも理解出来た。この、世界が壊れたという事実も、マスターの言葉だからこそ理解した。

私に初めてプログラミングされたのは“マスターの言葉を理解しろ”だったから。

私に心は必要ない。

心って何？ 私には分からない。ああ、必要ない。だから、知る必要はないのだ。

*

「お前は私に何か用か」

黒縁眼鏡にスーツ。　そんなきつちりとした姿で男は現れた。こ

こは田辺蔵蔵が所有する屋敷の一室だ。客室ではなく、蔵蔵本人のプライベートとして使う個人専用の部屋に、その男は現れた。穏和を思わせる笑顔を貼り付け、蔵蔵に微笑みかける。黒い短い髪は窓からこぼれる風にあおられていた。

蔵蔵はやたら豪華なソファに腰掛けたままその男を見つめる。

隣には黒い女物のスーツに身を包んだ女性が立っている。彼女の瞳は男を捕らえ、何も言わずにただ、立っていた。

「初めまして、田辺さん。私はあなたにどうしても会いたかったものですから」

砕けた口調より若干固い口調と言った調子で話し始めた男は相変わらず笑顔を浮かべている。扉の近くに立っていた男はかつかつと大理石の床を叩きつけ、蔵蔵の元へと歩み寄る。女性は相変わらず、無表情で男の様子を探り、蔵蔵は男に負けない笑顔を浮かべる。

暗い一室。三人の周りに流れる空気は、そんな一室にあった暗さである。一人一人、自分以外が何を考えているのか、探りを入れる。男は蔵蔵の目の前にあるソファの前で歩みを止めた。口元には相変わらずの笑みを貼り付けたまま。

「蔵蔵さんはこの世界が壊れたと言っていたじゃないですか。うん。私もそう思うわけでして。あなたの技術だったらこの世界から逃げ出せるのに、なーんで逃げださねえんだー何て思ったりして」

そう笑った男の視線は女性に向けられる。女性は相変わらず無表情で男を見つめたが、男が女性に今まで貼り付けていた笑みとは違う笑みを浮かべると、女性は微かに……微かに眉を顰めた。

蔵蔵は笑った。

「っは、まさかと思えばそんなことか。出て行け。私の考えは変わらん。そして、死ぬ気もない」

「……あらそーですか。分かりました。じゃあやつぱりあんたとは相容れぬ仲だと言っわけッスね？ ああ、何かこれ聞いたら安心したです」

どんどん敬語が崩れる男に、蔵蔵は何も言わず睨み付ける。男は

相変わらずへらへらした調子で笑う。そして、踵を返し、手をひらひらと振る。足音を踏みならしながら。

「そうそう。あなたのことをギャング団が探してましたよー？ 気を付けて下さいね。彼らには気品の欠片も無いツスから」

男はドアノブに手をかけ、その場から立ち去った。蔵蔵は扉を睨み付けたまま、女性に声を掛ける。

「あの男を見張れ。いいな」

「……了解しました、マスター」

女性は綺麗な日本語で呟いた。

「綺麗な女の子が私に何か用かなあ？」

男は蔵蔵の敷地内を相変わらずふらふらしていた。女性が見張っていたのに気付いたのか、男は立ち止まり、振り返りながら女性に問いかけた。女性は隠れることもせず、男の前に立つ。

女性は綺麗なブロンドの髪をしていた。さらさらと流れる髪は空からくる太陽の光に反射し、綺麗な金色へと輝きを増す。その光が敷地内の花を輝かせ、まるで女神か天女のようにそこに在った。瞳は空のように青く、澄んでいた。だが、男は本物の空を知らない。本物の太陽の光を知らない。全てが偽物で、全てが偽造物だったから。

相変わらず無表情の女性に男は笑いかける。

「うーん。君、アンドロイド？ なら、マスターから私を見張れとの命令をされたのですかね？ ならなら、私についてくる感じということでよろしいでしょうか？」

一気に捲し立てた男に、やはり微かに表情を変えたが、すぐに元の無表情に戻り、女性は、はい、とだけ返した。アンドロイドは人間に盾つくことを許されていない。だからこそ彼女は、人間である彼の質問に素直に答えた。

男はふんわりと微笑んで、数歩離れていた女性の目の前へと近づ

き、のぞき込むように彼女を見る。だが、彼女は動かない。

「えと、名前なんて言うのですか？ 呼べないですから」

そんな無邪気、という言葉が似合う調子で聞いてきた男にやはりまた微かに表情を歪め、ないです、彼女は呟く。すると今度は男が大きく眉を顰め、腕を組んだ。そしてうなり声を上げ、首を傾げた。そんな様子の男を見て、女性はいかに口元を緩める。

「名前、ないだ、と。あの親父は何て呼んでいるんですか？」

女性は親父、と言うのがマスターだと判断し、呟く。

「呼ばれることはありません。私が勝手に認識します」

たんと答えた女性に、男はそうか、と微笑み、そして彼女の肩を掴んだ。

「なら、君のことを私は勝手にミレイと呼ぶことにしましょうか」

みれい、男は彼女に名前を与えた。ミレイは目を見開き、驚いた表情をする。アンドロイドに名前が出来た。そして、自問自答する。私は驚くことができたのだろうか。いや、これは私が驚いているということだろうか。心とは何なのだろうか。この人は一体。

「私は灰杜。よろしくお願いしますよ。ミレイ」

*

灰杜は一目見た時からミレイに恋に落ちていた。蔵蔵が自分自身をつけるように命令したと聞いた時は心がおどったものだ。彼女は反則的に美しかった。作り物だということは関係なかった。彼女の美しさは本物で、灰杜の心を捕らえたのだ。

だが、灰杜はうすうす気付いていた。彼女に心がないと言うこと。そして、蔵蔵の言うことを何より聞くこと。それを知っていた。だから、少しずつ、少しずつ彼女に心を作ろうと考えた。だから、あえて大きく表情を表現した。身体で、顔で、全体で。微かにだが、

彼女の表情に変化が表れたのをもちろん灰杜は気付いていた。そして確信する。彼女はきつと、心を持つことが出来ると。

ミレイが灰杜を見張り三日が経った。ミレイは灰杜のころころ変わる表情に、見惚れ、そして、不思議な感情へと溺れていた。感情などと言うのはおかしな物であるがそうとしか言いようがないこの不思議なプログラム。

そしてミレイは気付いていた。この男はマスターの敵であると言うこと。排除しなくてはならない対象であると言うこと。マスターがこの世界から逃げ出すためには、この男を殺さなくてはならないということ。だが、ミレイにはそれがどうしても出来なかった。何故だかは分からない。理屈ではないことをミレイは知っていた。

庭を二人で歩く。ミレイに心が現れはじめたと気付いているのは灰杜だけだ。花がこんなにも綺麗で、海がこんなにも大きくて……全てはいらない感情だったはずだった。だが、ミレイは知ってしまった。全て、わたしが生きるために気付きたかったプログラムだということ。

「ミレイ。これが綺麗という物ですよ。忘れないで下さい」

いつもそうやって灰杜はミレイに伝える。ミレイはうなずき、どこかにあるプログラムが無意識に綺麗だと知らせる。

灰杜と一緒にいると楽しい。そんな感情が表れたのは一緒にいて二日が経った時だった。だが、その日にミレイはマスターに命令される。灰杜を殺せ。意味は理解した。そして眉を顰め、間を開けて答えた。はい、と。その後ミレイは外へと出たがマスターがその後と言った言葉を聞き入ってしまった。

「あいつのプログラムを初期化しなくてはならんな」

つまり今まで覚えたことを全て忘れるということだ。この綺麗だということも、美しいということも、今知った、前に灰杜に教えて貰った悲しいということも、灰杜のこと、全て、全て、全て忘れてしまう。

嫌だった。どうしても。隣に歩く灰杜を見る。灰杜は笑いかけた。
きた。

「ミレイ。私を殺せと、蔵蔵に言われたっすよね？」

灰杜はやはり察していた。

「泣かないで」

灰杜の言っている言葉が、ミレイには理解できなかった。

この世界が無くなる三日前。ミレイは蔵蔵の前に立っていた。灰杜を処理したと、マスターに伝えて。

「そうか。ありがとな。さて、君を消す」

初期化することだ。灰杜のことを忘れる。さよなら。さよなら、何で、水が出てくるのだろ。わからない、苦しい、息が来ない、なんで、わたし、かいとにいたい、かいと、って、だれ？ わたしは、わたしは……だ、ね？ これがまたー？ わたしは、ああ、そうだ。

「あなたがマスターですか？」

「そうだ。私の言うことだけをきくのだ」

世界は消えた。彼女が望んだのは、生きたい、たったそれだけのことだった。灰杜と共に、生きたかった。ただ、それだけのことだった。世界という物は残酷である。愛する者と生きることさえ、許されず。

ミレイと蔵蔵のその後は、誰にも分からない。

第二物語「わたしとあなたとすべてとさよなら」完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1161p/>

こわれちゃえばいいんだ。

2010年11月24日18時10分発行